

# 米山リサ著『広島 記憶のポリティクス』

野坂 昭雄

## 一

待望の邦訳刊行といったところだろうか。本書は、文化研究やポストコロニアル批評などの成果を踏まえ、原爆の理解に新たな観点を提示しているとして、アメリカでも大きな反響を呼び、高く評価されている。本来ならば本誌第四号にこの書評を掲載すべきであったが、刊行から既に一年以上が経過していることをまずお詫びしたい。原爆（文学）に関心を持つておられる方の大半は、既にこの書についてご存じのことと思う。今さら取り上げる必要もないかもしれないが、この書の問題意識を共有するためにも、簡単に内容を紹介し、それに対する評者の個人的な感想を述べたいと思う。

原爆についてはこれまで、その道義的な問題や物質的・心理的被害、原子力エネルギーとの関わりなど、さまざま角度から考察されてきたが、斬新な視点を持つた本書の考察が極めて重要な成果であることは、恐らく疑う者はいないであろう。著者は「序

章」の中で、この書の目的について次のように述べている。

一九二〇年代のグローバルな環境で普遍主義が代表した近代、進歩、文明は、西側諸国、特に冷戦下でヘゲモニーを握ったアメリカ合衆国によって排他的に占有されるようになり、日本は、国際的に認知された自然な領土を持つ、单一の民族あるいは人種に限定された国民として想像されることになつた。ポスト帝国の日本における政治的に緊迫した情勢は、多民族的、多人種的、多文化的な国内の構成員を不可視化し、帝国が彼らに与えた約束と苦痛とともに、日本と日本の旧植民地との関係を忘れ去つていったのだつた。このような記憶の欠落に異議を唱える者と、それを維持しようとする者とのあいだに繰り広げられている現在進行形の文化のポリティクスに作用する力学に光をあてることで、本書は、国家のそう遠くない過去の忘却を生み出した戦後のプロセスを解きほぐすことを目的としている。それは、広島の原爆による壊滅の記憶を人道主義的な語りやナショナル・ヒストリーの束縛から解き放ち、ポスト冷戦、ポストコロニアル的現実の領野に即して再考するためのひとつ試みである。（四一五頁）

ここに明確化されているように、著者の大きな関心は、戦後日本において形成されていった発展のイデオロギーや单一民族神話によって、多民族的、多文化的な状況が隠蔽され、戦前の大日本帝国との連續性が見えにくくなつてゐる点を批判することにあると言えよう。既に指摘されているように、单一民族神話は第二次

## 日本語版への序文 はじめに

大戦後に流布したものであるが、広島はそうした戦後のプロセスのいわばアリーナだつたと言える。また著者は、原爆という出来事の記憶を継承し、平和運動のような形に昇華させる際、さまでまな抑圧や忘却が政治的に機能してしまうことを批判している。また、今後私たちが原爆をめぐる文学的、政治的問題を考える際に念頭に置かねばならない重要なポイントを本書が提示している点も見逃せない。例えば「日本は唯一の核被爆国である」といった言説に典型的な、日本のナショナル・アイデンティティを強化するような力学に対抗し、韓国・朝鮮人被爆者など周縁化された存在を考察に組み入れることの必要性。また、グローバルな平和という観念に被爆者の個別的な体験を組み入れて馴致・無力化しようとする国家の戦略に抵抗していくことの重要性など。これらは、確かにこれまでの原爆に関する研究を大きく変えていく契機となるに違いない。

## 一一

拙著本書の内容について大まかに説明しておいた。本書は Lisa Yoneyama, *Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory*, Berkeley, University of California Press, 1999. の邦訳であり、著者が一九九三年にスタンフォード大学に提出した博士論文がその基になつてゐる。因みに、「訳者あとがき」によれば原書の中からアメリカ人読者向けに書かれた部分が著者自身により削除されている。全体の目次は以下の通りである。

### 序章

「無罪無垢という幻影」「国民・平和・人類の修辞」「碑文論争」「平和／原爆記念公園」「いかななる国」論争」「歴史的記憶のポリティクス」記憶の地図作成法

### 第一部

#### 第一章 記憶景観の馴致

「歴史の地図を書き換える」「祝祭」

#### 第二章 廃墟の記憶・記憶の廃墟

「ポスト核時代のハイパーリアル」「沈

#### 思の時」

### 第二部

#### ストーリーテラー

#### 第三章 証言活動

「語り得ぬものを語る」「証言の主体を名指す」「生存者・被爆者・証言者——複数の主觀性」

#### 第四章 記憶の迂回路

「語りの余白と批判的知」「寓話的記憶——『繰り返しません』の時間性」「死者の／ための語り」

### 第三部

#### 記憶と位置性

第五章 エヌニックな記憶・コロニアルな記憶——韓国人原爆慰靈碑をめぐつて——「論争渦巻く慰靈碑」「祖国へのモニ

「ユメント」「記憶の剩余」「不在のマジヨリティ」「関与する記憶の問題としての『民族』」

## 第六章 戦後平和と記憶の女性化

「平和・国民・母性」「女性の異論派たち」「『女性の』歴史を書き直すこと」

おわりに

訳者あとがき（小沢弘明）

全体は三部に分かれ、各部の中にそれぞれ二章ずつが置かれている。広島をめぐる政治的な問題を概観した序章に続き、第一部「記憶の地図作成法」では、広島が平和観光都市として行政主導で整備されていくプロセスを具体的に追い、原爆の記憶がどのように希薄化、馴致されていったのかを詳細に論じている。著者によれば、廃墟となつた広島では、原爆の記憶が保持されながらも、その記憶は復興した広島に相応しい形で空間的に再配分され、平和と繁栄を象徴する空間が新たに生み出された。文化研究の領域では新しい方法とは言えないが、広島という複雑な歴史を持つた空間を対象とした本書は、その後の原爆をめぐる研究に大きな指針を与えたと言えよう。しかも本書は、ポストコロニアル批評や文化研究の理論的な成果を広島に適用しただけのものではなく、綿密な調査や鋭い分析、豊かな発想にあふれたものである。

第二部「ストーリーテラー」では、被爆者の証言活動を考察の対象としている。著者は、実際に証言者に会い、彼／彼女らの語りがいかなる意味において「記憶」を伝えて（あるいは伝えられ

すに）いるのかという問題を扱い、さらに「原爆被爆者証言の集い」「ヒロシマを語る会」などの証言活動がいかにして公的な言説に組み込まれつつ、同時にそれとの差異化を目指しているのかを分析している。第一部では、都市開発の名の下に「記憶」がどのように取り扱われていつたのかを見たが、証言者の語りを通して伝達される「記憶」は、そうした公的で教育的な記憶を攪乱させようとする力を有していると言える。また、第四章では具体的な生存者の語りが考察されている。例えば広島に隣接した呉に住む生存者・松田豪との出会いが触れられる箇所では、神聖化される広島と周辺の呉や岩国との関係にも読者の注意を喚起しながら、松田の語りに見られる独特な戦術が分析される。その他、沼田鈴子や山崎寛治といった語り手にも言及され、伝達・共感の可能性をめぐつて語り手と聞き手の間に生じる緊張が指摘される。

第三部「記憶と位置性」では、まず韓国人原爆慰靈碑をめぐる言説を考察し、原爆投下地である広島の集合的なアイデンティティと、韓国人被爆者のアイデンティティとが交差、背反しあう地點を問題化する。また、戦前から戦後への変化が、男性的で好戦的な帝国から平和を求める母性的な戦後の民主主義への移行としてジェンダー化された形で表象されている点を指摘し、戦前の暴力の忘却を促し、被害者意識と無罪無垢性とを強調している戦後の状況を批判的に考察している。

もちろん実際に読んだ方は、ここで触れただけに留まらない幅広い問題意識や鋭利な分析を、本書の随所に見つけられることであろう。文化研究の成果としては第一級のものであると、まずは断言できる。

さて、本書の中心的な話題ともなっている「記憶」については、

最近さまざまな角度から論じられている。特にトラウマ的な出来事の記憶は、例えばキヤシー・カルースが『トラウマ・歴史・物語』（下河辺美知子訳、みすず書房、二〇〇五・二）で、アラン・レネ監督の『二十四時間の情事』（一九五九）について論じている。そこでは、実際に体験していない者がどのようにしてその出来事を追体験できるか、という体験の共有可能性が問題とされていると言つてよい。こうした問題系は、かつて映画『シヨアー』が提示した証言可能性をめぐる問い合わせとも重なり合うものだが、筆者はこうした「記憶」の問題を、それを取り巻く政治的なコンテクストから説明しようとする。例えば筆者は、「過去についての知の生産は、「歴史」と「記憶」のいずれのかたちであれ、つねに権力の行使の網にからめとられており、抑圧の要素をともなうということである。（…）簡潔にいえば、私が記憶という概念を用いるのは、過去を知ることと、過去についての回顧が起こるコンテクストとを切り離すことはできないことを強調するためである。」と述べている。

記憶が構成される状況自体への目配りなく、記憶の内容のみを対象とすることは、もはや考察としては不充分なものとなつてしまつたのだろう。これまで記憶は、記憶を構成する主体内部の問題として処理されることが多かつたが、その主体を取り巻く文化的、政治的な状況こそが実は記憶を抑圧したり解放したりするバ

ルブの役割を果たしていると捉えることで、私たちは、例えば戦争の記憶を想起させるような様々な表象と、他の政治的な動向とがどのように交差しているのか、といった点を批判的に分析できる視座が与えられたと言える。

ただし、こうした考察に何かしら物足りなさを感じるのも確かである。小沢節子氏は本書について、「一九八〇年代の社会現象を一九九〇年代の現代思想で分析した部分など、それは同時代の状況分析としてはまさにその通りだと思うけど、今読むのはちょっとつづらいところもある。もうちょっと違う角度からいえば、時間が経過していくなかで現実が理論の枠組みをすり抜けて行くというか、そもそも理論的なものでは多分とらえきれない何かがあるんじゃないか」（『原爆文学研究』増刊号参照）と述べているが、評者も同じような印象を抱いた。

例えば、本書の第二章「廃墟の記憶・記憶の廃墟」で、広島赤十字病院（原爆病院）の保存に関する論争が取り上げられているが、その中で「あの惨状が私の思いでのなかに残つていれば十分です」として保存に反対する六一歳男性の投書を、筆者は批判している。筆者によれば、「古くなつた日赤は思い切つた設計で立派な医療施設として、生き残つた私たちのために役立つ方がいいのではないかでしょうか。」という投書の一節には、「日本の戦後復興に利用された合理性を支え、広島やそのほかの地で優勢となつてきた時間的イデオロギーが要約されている」のだが、この投書はこうした解釈のみを許容するものではない。自分の父親が「日赤の玄関わきに転がつてい」たというトラウマ的な記憶を「私の思いでのなかに」のみ保存したいという思いは、保存運動や平和

運動が被爆者の記憶を略奪・横領していることへ批判とも読めないだろうか。この投書を筆者が戦後のイデオロギーに加担するものとしてしか解釈できない点に、本書の方法的な限界が示されているのかもしれない。小沢氏が上で述べていたことの繰り返しに曖昧さや躊躇、残余といったものがあまり見られないような気がするのだが、どうであろうか。

ところで米山氏のスタンスは、論争的な場を構成するような言説を評価するというものだと言える。例えば、広島に関する慣例化した言説や惰性化した平和運動などに亀裂を入れ、自明な同一性を揺るがすような力を備えた言説を筆者は評価するが、それは文化研究の戦略としてはあるべきものだろう。また日本国内の政治的状況を踏まえつつ、平和をめぐる普遍的な言説から被爆者の語りを差異化していくだけでなく、被爆者の内部でも安易な同一化を避けてさらなる差異化を行つてはいる。ところで「差異」について筆者は、『暴力・戦争・リドレス』(岩波書店、二〇〇三・一、但し執筆は本書より後)の「はじめに」で、「差異ばかりを強調しては対立を生むだけなのではないか」との問い合わせしばしば投げかねられた事実に触れ、それに対して「差異の強調が反目につながるのではなく、差異の抑圧が分断を生み出すのであり、また、差異そのものが対立を生むのではなく、差異にもとづく内的統一性の強調と、無批判で排外的な同一主義が原因なのだ」「差異について批判的に思考することは、より多くの連帶を生む契機となる」と答えた旨を記している。だが、この「差異」に関する批判的思

考は、いかなる地点において「連帯を生む契機となる」のだろうか。そもそも「連帯」が生まれるとはどのようなことなのか。

第四章「記憶の迂回路」では、広島の証言活動がどのような意味を持つてはいるかが論じられている。筆者は、一方で語り手は出来事そのものではない記憶や語りによる出来事の再現が不可能であることを認識し、また生存者と死者との同一化も厳しく禁じてはいるが、他方では伝達可能性と体験を共有する可能性への願望も有していると指摘し、両者の間にある種の緊張関係を認めている。具体的な例として挙げられるのが、問題を抱えた生徒たちが被爆者と出会うことで変わり始める、という内容を持つテレビドキュメンタリー「絆」である。生徒たちは、被爆者の中に自分たちとよく似た境遇を見いだしたのだとコメントする。

ここで筆者は、それが危険なものであることを十分自覚しつつも、しかし被爆者とそれ以外の者との間に生まれる瞬間的で断片的な同一化を評価している。「連帯」とはこうした共感によつて構築される関係性のことであろう。そして、差異を発想の基盤にして同一化を批判する筆者が例外的に同一化を認容する際には、そこに批判的な知という位相が導入される。例えば、戦争をめぐる言説においては、共感を呼び寄せて被害者意識を高めるような同一化が大量に生産されるが、筆者によれば、あるべき「共感」とは物事を批判的に捉える視線を植えつけるような要素を持つてはいけなければならないことになる。だが、「批判的」であるとはいかなることとなる。記憶は確かに過去の出来事から発するものだが、しかし記憶を語るとは、何らかの場においてその都度形成される関係性を生きることでもある。だから「批判的」と

は、一度形成された関係が、何らかの体験によつて変更を迫られるという可能性を、受け入れるということでもあるはずだ。それは、アイデンティティを複数のものと捉え、差異化を実践していく文化研究が、倫理的な次元（それはそれまでの考察の次元からの跳躍を必要とするだろう）を切り開いていく契機ともなるのではないだろうか。

#### 四

非常に重要な問題だと感じるのは、本書において日米関係の問題が迂回されているように見える点である。国家権力の側がどのように原爆（の記憶）を利用して戦後の民主主義的国家を構築していくのか、また日本のナショナル・アイデンティティを強固にしながら平和運動と慰靈との折り合いをつけてきたか。そうした問題は、アメリカという参照項なしには本来論じられないはずだ。著者がどのようなスタンスから広島を論じているのか、極めて強い関心を覚えざるを得ない。

アメリカでは、本書に先立つて John Whittier Treat, *Writing Ground Zero, Japanese Literature and the Atomic Bomb*, Chicago, University of Chicago Press, 1995.（未邦訳）が刊行されている。アーチの方法は大きく異なるが、大まかに見れば両者の批評的な戦略は類似していると言えよう。トリート氏が原爆文学を主に取り上げているのに対し、米山氏はモニメントや証言等における「記憶」の様態とその政治性を問題にしているという違いはあるものの、いずれも支配的な観念や言説に対抗するものとして、

原爆をめぐる文学や証言を取り上げているからである。原爆を語る（記憶する）ことの中に、既存の文学的制度や帝国主義的言説などに亀裂を生じさせる力を認める点については評者も同感である。

だが、先にも触れたように、著者が邦訳を刊行する際に合衆国読者向けの部分を削除している点が気になる。原書を読んでいいので、どのような部分が削除されているか不明である。日本人にとつては自明な原爆に関する基礎的情報（自明な情報などないとは思うが）で、邦訳には不要と判断された事柄であれば理解できる。しかし、学術書とはいえ、アメリカでまず出版された本書が合衆国の読者に向けてどのような言葉を発しているのかに評者は興味を感じるし、その削除についてはもう少し説明がほしい気がする。

アメリカ人であるトリート氏が原爆文学を研究する際、日米双方からさまざま反応があつたことが、その序で述べられている。特に多かつたのは、原爆の問題を今さら蒸し返すことに抵抗を感じるような反応だつたらしい。原爆投下から半世紀が経つた時期に、アメリカでこうした書が刊行されるに至つたコンテクストも、現在アメリカで原爆についてのどのような知（あるいは無知）が生産されているのかも、日本で活動する研究者には見えにくい。少なくとも序を見る限り、トリート氏はアメリカ人のアイデンティティと原爆とを歴史的に結びつけようと試みているが、研究上のエピソードを披瀝することは、氏がいかに慎重に自らの位置付けを行つてあるかを読者に伝達する役割を果たす。分析の正確さなど並んで、研究者がなぜそのテーマを選びどのような立場から

書いたのか、ということは言うまでもない。

米山氏と同じくアメリカで日本研究をしている酒井直樹氏は、日英語双方で研究したり書物を執筆する際、「われわれ」という語の用い方に極めて意識的にならざるを得なかつた事実を、『日本思想という問題』などで記している。一方の米山氏の場合は、

そうした点についてどのような意識が払われているのか。本書において氏は、戦後日本がいかに帝国主義的な過去を忘却し、首尾一貫した戦後国家観を構築しようとしているかを追求しているが、それがアメリカにおいて研究成果として公表される背景には、どういったコンテクストがあるのか。アメリカで日本研究をする日系人という米山氏の立場は、そこにどう関わっているのか。個人的な感想に過ぎないが、その点を本書でもつと詳しく書いてほしかつたようと思う。なぜなら、原爆の問題を考える上で、氏が実践しようとしているトランス・ナショナルな見方は不可欠だと感じるからだ。

実は、先に触れた『暴力・戦争・リドレス』の第三章「記憶と歴史をめぐる争い』では、スミソニアン博物館の原爆展示をめぐる論争を契機とした、アメリカ側の「記憶」をめぐる抗争が詳細に論じられている。その点で、本書と『暴力・戦争・リドレス』とは、原爆に関する考察としては互いに相補的な関係を築いていえると言える。両書を読まなければ、原爆投下とその後をめぐる日本における見方が対照的などろか、むしろ共犯関係にあるという著者の考えも見えて来ないだろう。逆に、その共犯関係に敏感になれば、私たちの考察も新たな段階を迎えるはずだ。

## 五

いろいろと駄弁を弄したが、最後に本書の中で印象に残つた一節を、少々長くなるが引用してみたい。

しかしながら、これ（民族誌学者の客観性：評者注）と別種のアウトサイダーという観点が、本書の調査においてもこの本を執筆するうえでも、意識的に追求されてきた。それは、そのような位置が伝統的民族誌学者が言うような特定の価値観に束縛されない客観性を保証するからではない。私たちの大半は、アウトサイダーとしてしか広島の記憶と証言に接近しえないからだ。広島の過去について論じる人々は、その意味の本来性や必然性を当然視しがちである。だが、多くの人間にとつて、なぜ広島の過去と現在を知る必要があるのかは、自明というにはほど遠いのだ。この場所やその知に歴史と人々に実存的なつながりを見いださない人たちにとつて、そこで起こつたこと、起こりつづけていることと自分たちとの生とが分かれ難く互いに連結しあつてゐることにどのようにしたら気づくことができるのだろう。

（五五—六頁）

「多くの人間にとつて、広島の過去と現在を知る必要があるのかは、自明というにはほど遠い」とあるが、実は「広島の過去について論じる人々」にとつてもそれほど「自明」ではないと思う。何らかの明確な目的を持つて論じる人もいるが、論じる中でその

人固有の意味を見いだしていく人もいるかもしれない。それはともかく、少なくとも著者は、広島の考察が一つのアナロジーとなって、別の場所、別のコンテクストで生じている出来事が想起されるような関係性を構築することを、広島を語る意味の一つと位置づけている。普段は意識しないが自らの周囲に生じていることに対しても、広島を通じて批判的な態度を取れるようになることが、広島の過去を知ることの一つの意味なのだとすれば、それがたと

え傷みを伴うとしても私たちは語り続けなければならないだろう。その理由を著者は、トリン・T・ミンハの意見を参考しながら、『他者のために発話することの危険性』について内省するだけでは、自己と他者の関係を変革するうえでは十分であるとはいえない』からだと述べている。

（小沢弘明他訳 岩波書店 二〇〇五年七月三〇二頁 三三〇〇円+税）